

この切り札に祝福を！

好きなものfateとフェイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

通り魔に襲われ殺害された青年堂島始。眼が覚めると目の前に自身のことを女神と名乗る少女が居た。そして異世界に転生する事を望んだ彼は何と特典で仮面ライダーの力を手に入れた！

さあこれを持って英雄に……なれるほど現実は甘くなかった。

目次

プログラグ

1

プロローグ

気がついたら僕は真つ暗な世界に立っていた。そこには僕だけしか居ないのかなと思つたが、そんな事はなく目の前に、綺麗な青色の美女が立派な椅子に座っていた。

「ようこそ堂島始さん、私の名はアクア水の女神であり死者の世界の道先案内人を行なっています」

あ、この人痛い人だ。

そう悟つた僕は「それじゃあお疲れしたー」と、バイト終わりの様に自然にその場を去ろうとした。(自称)女神も僕のあまりにも自然な振る舞いに「お疲れー」とさも当然の様に返事をし、僕が横を通り過ぎると「ちよつと待ちなさいー」と呼び止められ、聞こえたかどうかは分からないが一度だけ舌打ちをしてもといた場所に戻つた。

「あんたここの事何も知らないでしょ。まだこつちは説明しなくちゃいけない事があるのよこつちは、全く人の話は最後まで聞きなさいって親に教えてもらわなかつたの？ プークスクス」

その笑い方そして仕草にかなりイラついたし、思いつきり殴りたくなつたが、女神を自称するあいつの言う通りこの場所の事や、その他諸々の事情が分かつてないのは事

実だし、聞いておくことにしよう。

※

色々話しを聞いてここが死後の世界だということは理解した僕は、思い出した事があつた。僕の死因についてだ。僕の死因、それは出血多量によるショック死だ。僕は生前彼女が居た。別に恋愛漫画みたいな甘酸っぱい青春でも、昼ドラみたいなドロドロしている訳でもない。互いに何となく付き合う事になつて、何となく付き合っていた。

そんなある日、僕らはただ何か特別なことをする訳でもなくゆつたりとデートをしていた。そして、近くの公園でトイレを済ませて戻ろうとした時、僕は背後から近く人影に気づかず刃物で背中を刺されたのだ。最近噂になつていたカッパルの彼氏の方を狙う連続通り魔事件の犯人と思われる奴に刺されたようだ。そして僕は気がつくところ居た。それが僕の最後。

僕はまるで天を仰ぐかの様に顔を頭上に上げてみた。他者から見たら凄く落ち込んでいる様に見えるだろうが、僕はそこまで落ち込んではいなかった。もちろん死んだことは、まあ：悲しかったり悔しかったりするが、けれどそれ以上に「人間ってそんな物か」という他人事みたいな自分が居た。

「僕を刺した犯人はどうなつたんすか？」

まあ人間でないのは確かだし、本当に女神かもしれないから、一応敬語で聞いてみ

た。

「あの犯人なら、貴方を刺した後に別の男性2人を同じ手口で殺害した後に、警察に逮捕されて今裁判中よ。一応犯行に及んだ理由は、自分は恋人が居ないのに、他人が居るのが妬ましかった。被害者は恋人の居る男性なら誰でも良かった。つて言ってるみたいね」

僕は「そうっすか」とだけ言つて軽く息を吐いた。

そんな僕を見た女神は「こほん！」と強く咳払いをした。

「さて、貴方には3つの選択肢があるから、よく聞いて考えなさい。まず1つはこのままあの世に逝つて天国へ行く。2つ目は何もかも捨てて忘れてもう一度地球で第2の人生を歩む。そして3つ目、今の姿、今の肉体でチート級の能力を手に入れて異世界に転生して魔王討伐に向かう。さあどれが良いかしら？」

僕は迷わず異世界での転生を選んだ。別に大した理由じゃあない、男なら誰だつて幼い時に馬鹿みたいで純粋な夢を見るだろう、正義のヒーローになつて悪い奴らを倒したい。そんな夢物語を：異世界に行つたから、そして反則級の武器や能力を貰つたからと英雄や勇者、ヒーローになれるなんて思つていないし、今ではなろうとも思わない。それでも、今の自分が全てリセットされる前に少しでも今の自分を変えたい、ただそれ

だけの陳腐で平凡な願い…

僕は自称女神のアクアが床にばら撒いた特典を拾い集め、どんな物があるのか色々見ていた。まあハッキリ言って、能力自体は様々だが性能はそこまで変わりが無かった。ということとは、こういう物を決める時は「フイーリング」つまり「気持ち」の問題だ。カッコイイ、カワイイ、気に入ったら等の気持ちから決めるしか手はない。

「ねーまだ〜！どれも大して変わらないでしょ〜、後が控えてるんだからさっさと決めてほしですけど〜」

自称女神が何かうるさいが、無視して決めていた。武器系はいざという時に防御力に欠けるし、防具系は逆に攻撃力に欠けるし、能力系はイメージが重要になるようだし、アイテム系は使い所が限られたりする物ばかり、何でも良いから使い勝手が良い物はないだろうか…

僕はこのままじゃ埒がないと考え、何かオススメみたいな物は無いか？と自称女神に尋ねた。

だが、今思えばこれは一番悪い選択肢だったのだろうと今では思う。

自称女神は面倒くさそうに考えると、すぐに何かを思い付き立派な椅子から降りると、その後ろに行き何かござごと行っていると、しばらくして戻ってくるとその手には何処かで見覚えのあるベルトを持っていた。

「J、じゃなかった。カリスラウザー!」

そう言つて自称女神は自慢気にそれを掲げていた。僕はあく懐かしい…と思いなからそれを見ていた。

「良い、これはね仮面ライダーカリスに変身出来るだけじゃなくて、ブレイド、ギャレン、レンゲルにも変身可能!そして、この4種類は全てジャックフォームとキングフォームに変身出来るのよしかも融合係数はジョーカー並!まあ、デメリットとしてはカードを制御する為に、使用者を大体10%くらいアンデット化してもらうけど、でも殆ど人間と変わらないわ。少し普通の人より傷の回復が速くて、長生きするぐらいだから。どう、凄いでしょ!」

自称女神が話し終わる頃には、僕はさっきの特典選びを続行していた。すると自称女神は涙目になりながら「何で無視するのよ!!?」と言いながら抱きつきながら僕の身体を揺らしてきた。

「これはね、確かに私の上司連中悪ノリで創った物だけど、性能は本物なんだから!!?何ならアンデット達を解放した時は、人間に擬態する時に全員美女美少女にするから!!?カリスのバイクだつてオマケで付けるし、それから浄化魔法かけられてもダメージが無い様にするから!とにかくこれ、本当にアンデット臭くて持っているだけでも嫌なんだから!!?それに、強い力を手に入れる為に多少の犠牲を払うのは当たり前でしょ

!

何か途中で本音を吐露していたけど、最後に言っていた事は事実だ。どんな事にも犠牲は付き物、買い物をするにしても、学校のテストで良い点数を取るにしても、そして人命を救うにしても……

「分かった。分かったよ僕の根負けだ、それを貰うよ。その変わります、ちゃんとこれについての説明はしてくれよ」

僕が根負けして説明を頼むと、一応この自称女神は説明してくれた。

まず、カリス以外のライダーであるブレイド、ギャレン、レンゲルに変身するにはそれぞれのカテゴリリーAをカリスラウザーにスラッシュするだけで良い、ジャックやキングフォームになるには、腕に装着されるアブゾバーを使用すること。ワイルドカリスになるにもアブゾバーを使わなくてはならない。そして、カードを使う為のAPは無くなっていった。だが、使えるカードには限りがあり、ノーマルフォームでは3枚まで、ジャックフォームは2枚までそれ以上コンボで使うと肉体が自壊するとの事だ。

「キングフォームとジャックフォームは他に何かあるのか?」

「ジャックフォームは大した事はないけど、キングフォームとワイルドカリスは使用しすぎるとどうなるか、分からない訳じゃあないでしょ」

「……まあな」

そのフォームになり過ぎるとどうなるか、それは分かっている。まあ、ケンザキ君みたいになるつもりはないが…

「さてと、能力についての説明はこれくらいにして後は向こうに着いてからだけど、とりあえず向こうのお金は多少そのポケットの中に入っているから、それで初心者冒険者が集まる町アクセルで冒険者になつて魔王を倒しなさい。そうすれば神々があんたの偉業を称えて、どんな願いでも叶えてくれるという特典付きなんだから」

そういう事は、もっと早く言つてほしいものだが、とりあえずその後も概要だけ向こうの世界についてを聞いていると、突然僕の周辺が丸く光りだすとゆつくりだが身体が中に浮かんでいった。

「達者でね、頑張つて来るのよー」

「もうちよつと威厳のある言い方は出来ないのか!!?」

「ハックション！」

その女神とは到底思えないくしゃみを最後に、僕は異世界へと旅立った。

sidout

「ズズっ！ふふん、今回も完璧に仕事をこなしたわ。流石は私ね」

女神アクアは鼻をすすり、胸を張りながら椅子に座ると、背後から一人の女神が

入ってきた。

「アクア先輩ご苦勞様です。こちら回覧板になりますので、後で読んでおいて下さい。なんでも今回は重要な案件らしいので」

「はいはい、後で読んでおくからそこに置いていて」

アクアの言葉に従い、後輩女神は回覧板を置くとまた何処かへ姿を消した。

女神アクアが回覧板を手にし、面倒くさそうに中身を確認していると『最重要』と判を押された紙が入っていた。

『以下の神器に大きな欠陥が発覚したので、持っている神は速やかに神器保管委員会に提出をお願いします。御協力お願いいたします。』

と書かれており、その下には数々の神器の名前が書かれていた。そしてその中にこの様な名前があった。

『カリスラウザー&ラウズカードセット』

そしてその下にはこう書かれていた。

『尚、上記の神器を紛失したまたは転生者に与えた者は、どのような理由があれ滅給と神格の降下処分とする』

始は異世界に転送されると、少しの間気絶していた。だが、浮遊感を覚え目が覚めると空中から落下していた。

「ぎゃあああああああああああ!!？」

ザブーン！と音を立てながら、運良く湖に落下する事が出来た始は、ゆっくりと岸に無事になるとその額には青筋で出来た見事な怒りマークが付いていた。

「あいつ、この何処が初心者冒険者の街だよ。思いつきりジャングルじゃあねえか、いつか絶対にボコボコにして泣かしてやる」

そんな事をブツブツと言いながら、始は森の中を歩いていると力の確認をする為に、カリスラウザーを装着した。

装着しまずは一通りの力を使って見るために、右腰部分にあるカードケースに手を掛けると、始が開ける前にカードケースが勝手に開き中にある54枚のカードが飛び出し、その中の殆どのカードの封印が解かれてしまった。

始はその光景に恐怖し、一時的にその場を離れた。そしてしばらくして戻ってみると、その場にあつたのは52枚のブランク状態のラウズカードとハートの1と2だけが残されていた。

そして、始の頭に一つの声が響いてきた。それは、

『これより、バトルロイヤルを開始する』

というものだった。

「ウソだドンドコドーン！」

それが特典により人を少し辞めた堂島始の、異世界で放った始めてのオンドウル語だった。